

柚木かおり（関西外国語大学）

2016年11月16～18日、モスクワの国立芸術学研究所の国際コンファレンス「娯楽と芸術」（主宰：演芸・娯楽部局 E.ドゥーコフ教授）に参加した。当該部局は「夜と芸術」など様々なテーマを出して文化学の研究発表の場を定期的に設けており、そこは学閥にこだわらず参加者も聴衆も訪れるという、ロシアとしては稀な集まりとなっている。今回のコンファレンスはテーマがテーマだけに、発表者は研究所内の参加者が多い回となったが、聴衆は相変わらず多岐に渡り、研究者以外の「マニア」と言えるような参加者も見られた。

研究報告の行程は基本的に、1日目は理論、2日目はアメリカとロシアから現役のピエロを招いてのワークショップ、3日目は実態の研究で行われた。題目としては、「ロシア文化における笑い：メンタリティからジャンルまで」（H.フレーノフ）、「“西側”という甘い言葉：我々の歌と、彼らの我々についての歌」（Д.ジュルコーヴァ）などがあった。

私は3日目の最後のブロックに、極東研究というくくりで入れられた。このブロックは、ロシア科学アカデミー極東支部からモスクワに移って来たばかりの B.コロリョーヴァという非常に経験豊かな研究者が先導した。その他、俳優かつ歌手 A.ヴェルチンスキイの研究者2名の発表があったが、質疑応答は多岐に渡り、かつ時間を大幅にオーバーする白熱ぶりで、注目の高さがうかがわれた。彼は革命後から戦後まで上海のフランス租界に身を置いており当時のエピソードも披露されたが、伝聞によるものでしかないため、上海時代のさらなる研究の必要性が指摘された。

私の発表は「上海におけるバレエリュスのダンサーたちの舞台」という題目で、戦前の上海のフランス租界に存在したロシア人社会の文化に関わるものであった。対象は「上海バレエリュス」という団体で、1934年11月のその発足および戦中までのそのバレエダンサーたちのパフォーマンスの場を分析した。

発表の資料となったのは、平成23年度科学研究費補助金基盤B「上海租界劇場文化の歴史と表象－ライシャム・シアターをめぐる多言語横断的研究（研究課題番号：23320050）」（代表者、大橋毅彦）で得られた、上海市立図書館徐家匯蔵書楼所蔵の当時のロシア語新聞である。私は2015年から当該グループには協力者として参加し、最終年となった2016年8月には上海社会科学院で行われた国際シンポジウム「文化空间与文化融合」で日本語で発表し、中国語で論文集に掲載された。

その発表の際、ロシア人社会の生活やロシア人アーティストの芸術を追求するプロフェッショナルリズムをロシア側から描いたことが、中国研究者からも日本研究者からもある種の違和感を持って迎えられたことに疑問を持った。彼らにとってロシア人たちは、「国を追われて帰るところのない可哀想な人たち」であり、それを「養ってやった」という自負があったのであり、そこにはロシア社会内部やプロの意地だとかプライドだとかいう視点はありようがなかった。実際そうなのだろうとは思う。対して、私はロシア研究者であり、周囲はみな音楽家の舞台人であるから、その苦しい生活の中でプロの芸術家が一体何を考え、どう行動したかに何よりも目が向いた。ポジショニングの違いによるその違和感を埋めるべく、彼らの故国に成果を返そうと、中国語での論文をもとに加筆し、今回の私費での渡航を思い立った。

上海バレエリュスは、C.ジャーギレフのバレエリュスを模して、1934年11月に40名あまりのバレエダンサーにより結成された。亡命ロシア人という立場、かつ国際都市の租界という特殊な環境において、

彼らの舞台はライシャム劇場のバレエだけを演目としたケースは決して多くはなく、「バレエつきオペレッタ」での出演が多かった。バレエダンサーはまた、ロシア人や外国人の集う上層階級の舞踏会や、ロシア人だけが集まる民衆の縁日にも出演した。わずか2万人足らずの亡命ロシア人の文化空間では、チャストゥシカやブランコといった民衆の娯楽と、バレエや交響楽団といったハイカルチャーの芸術という要素が、革命前のロシア語の文字と表現とともに同時に存在した。アーティストたちは、そんな時間も空間も娯楽も芸術もないまぜの国際都市で様々な舞台に立ちながら、彼らの伝えるロシアの一部としてプロの誇りを棄てずに生きていた。

発表は新聞の切り抜きを多く見せたこともあり、読み上げていく過程ですでに方々で笑いがあがり、好評だった。また、アーティスト側から切り込んだことによる共感も得られた。ロシア人のポジショニングとしてはこういったテーマだとどうしてもロシア万歳一辺倒の論調になるのだが、第三者が書くことによってより客観的になったというコメントもあった。

休憩時間には「極東ブロック」の研究者が集まって、有意義な意見交換ができた。うち、フィンランドのロシア研究者とは今年3月に徐家匯蔵書楼に1週間行き、共同で資料収集を行った。その成果は共同でどこかで研究発表をしたいとは思っている。

私の本来の研究対象はバラライカであるが、今後も折に触れ、上海の亡命ロシア人の文化史について研究していきたいと思う。上海の同図書館にはロシア語の新聞が多く保管されており、宝の山となっている。モスクワと比べれば、日本からは上海はすぐそばにある。日本のロシア研究者による研究が行われることを願う。



国立芸術学研究所 入口



筆者の発表の様子